

図書館だより 第31号



「とやま駅南^{えきみなみ}図書館」(愛称・ぶらり)内の話題図書コーナーで読書をしている様子です。このコーナーは、話題のテーマに関するものや、若い世代に向けた企画展示をしています。

目次

平成20年度 富山市立図書館協議会 質疑応答	2
経営・創業相談室	4
いちおしライブラリー 第19回 「ことばの力」	5
岩倉政治文庫の資料 5	7
レファレンスあれこれ	8

平成20年度 富山市立図書館協議会 質疑応答

図書館協議会とは

富山市図書館条例に基づき、図書館の運営に関し、館長の諮問に応じたり、図書館奉仕について館長に意見を述べるため「図書館協議会」が設置されています。

(根拠法令は図書館法16条による)

富山市立図書館協議会は、各委員の任期を2年とし、本館から選出された7名、各地域館から選出された6名、公募により選出された2名の計15名の委員で組織されています。

7月30日(水)、市立図書館本館7階の特別室において、平成20年度富山市立図書館協議会が開催され、図書館職員と協議委員13名(欠席2名)によって図書館運営についての説明や質疑応答が行われました。

まず、図書館側から19年度事業に関する説明と20年度の主要事業についての概要説明が行われたあと、各委員から次のような質問や意見が出されました。

最初に、議題(1)平成19年度主要事業の実績について、(2)平成20年度の主要事業について、(3)本館のアスベスト除去工事に伴う臨時休館の経緯について、概要を説明した。

最後に総括的な質疑が行われた。以下はその概要である。

(質問)

アスベスト除去工事については、12月補正予算で90,000千円あまり計上されているが、決算額からすれば50,000千円ほどで完了したということか。

(回答)

12月補正予算で要求した90,000千円というのは、17年度に一度積算をした際の額に基づいている。アスベスト除去工事については、年々、工法と新たな技術改良により、低価格になったと考えられる。

(質問)

本館が4ヶ月休館し、その間にアスベスト除去工事と外壁の改修工事がなされ、より安全性が確保されたことはうれしく思う。また、とやま駅南図書館は、駅前であり、通勤等の市外の人にも利用してもらえること、「ぶらり」のネーミングが非常に良いと思う。

分館の民間委託は、3年計画で10分館を委託とのことだが、図書館の業務委託は専門的な知識を十分に持ち合わせている人が必要と思うが、委託分館に専門職はいるのか。また、人員配置に変化はあるのか。

(回答)

委託分館の職員は全員、司書資格を持っている。

また、委託前も、委託後も人員配置は2名のみである。

委託において困っている点は、委託した業者の職員は、他の図書館の経験があっても、富山市立図書館の経験がないことから、業務の中でも特にストーリーテリングなどの経験が必要な児童サービス(読み聞かせ、学級招待等)に戸惑っていることである。

(質問)

とやま駅南図書館のリニューアルオープンはけっこうなことだと思うが、そのせいで本館の建て替えが延びるのではと案じている。

細入図書館については、蔵書数が少ないことや、嘱託職員しかいないからか細入から大沢野図書館に借りこられているようだ。細入図書館は学校の図書館と統合すると聞いた。学校司書がいるので良いことだと思うが、一般の図書館と学校の図書館では、出入口ひとつをとっても、いろいろと違うのではないか。

(回答)

細入図書館と神通碧^{じんずうみどり}小学校・榆原^{にれはら}中学校図書館との一体化は、山田図書館が山田小中学校図書館と一体化したときと同じ、学校図書館を地域開放したイメージである。榆原^{にれはら}中学校大規模改造・神通碧^{じんずうみどり}小学校移転改造工事が終了した後、細入図書館を移設するのが平成21年度の予定であり、図書や書架等の備品を整備していきたい。

(質問)

学校図書館と一体化したときの図書館は、日曜、祝日も利用できるようになるのか。

(回答)

山田図書館と同じ(土曜は1日、日曜は午前中のみ開館)になる予定。祝日の開館については、現在のところは本館と八尾地区の図書館(ほんの森・八尾東町分館・八尾福島分館)及びとやま駅南図書館のみで実施している。

(とやま駅南図書館見学後)

(質問)

とやま駅南図書館は無料の駐車場がないが、本の返却は他の館でもよいのか。

(回答)

他の館でもよい。

(質問)

とやま駅南図書館はビジネス支援に関する図書を充実させるということなので、図書の更新が必要になってくるのではないかと。また、新しく来館する子どもたちも多く、児童書も含め、一般書も全体的に蔵書が少ないという声を聞くので、来年度以降、蔵書の充実を考えて予算を確保していくのか。

(回答)

予算がつくかは分からないが、とやま駅南図書館は面積も大きく、将来的にまだ蔵書を増やすスペースもあることから、毎年、予算要求はしていく。ビジネス支援については、3階にあったときは経済・法律を中心とした蔵書であったが、今後は、ビジネス支援に関わる分野の図書を幅広く充実していきたい。

(質問)

本屋で見たい本が見つかったら、分館にリクエストするのだが、新刊は買えるかどうか分からないと言われる。図書購入費の予算があるのに、なぜ買えないのか。また、宮尾登美子「天璋院篤姫」については予約が多く4ヶ月も待った。

(回答)

図書購入のリクエストについては、選書の際、考慮しているが、全部、買えるわけではない。富山県内のほかの図書館にあれば、それを借りて提供することもある。また、ベストセラー本は、複本の購入数を絞り込んで、その分、他の図書を幅広く購入するようにしており、特定の本に予約が多くついてしまうという現象がおきる。リクエストの本がなぜすべて買えないかについて、分館の窓口でも現状を説明したい。

(質問)

とやま駅南図書館は、組織上、分館でもなく、地域館でもないと思うが、その位置づけについて富山市立図書館条例を改正したのか。

(回答)

6月議会において改正済である。とやま駅南図書館は、分館でもなく、地域館でもない位置づけである。地域館は、旧町村の本館であり、分館より規模が大きくサービスエリアが広いという概念である。とやま駅南図書館は通勤の利用者が多く、広域的な図書館という概念だが、位置付けとしての名称はつけなかった。全国的にも、条例上は個々の位置付けがなく図書館名が羅列してあるところが多い。富山市は分館が多く特殊な事情のため、位置付けを仕分けした。

(質問)

「平成 19 年度図書館事業実施概要」には、とやま市民交流館図書サービスコーナーのまま出ているが、とやま駅南図書館とすべきだったのではないか。

(回答)

冊子の印刷時には、まだ 6 月議会中であり、条例改正が可決されていないため、とやま駅南図書館の名称は使用できなかった。

(質問)

“とやま駅みなみ”と呼ぶのでいいですね。

(回答)

富山駅北側がすでに「えききた」という呼び方が定着しており、「えききた」に対して「えきみなみ」とした。

(質問)

開館時間が 21 時までというが、20 時以降の利用状況はどうか。

(回答)

20 時～21 時は、1 日の利用の 2.4%である。

(質問)

とやま駅南図書館の 20 時以降の利用が少ないと言われたが、人件費、電気代等を考えて開館時間をくり上げる考えはあるか。

(回答)

費用対効果を考える必要はあるが、開館時間をくり上げることは考えていない。

(意見)

いろいろな意見が出てありがたい。中でも委託の職員の専門性と図書購入の予算確保については、努力をしてもらいたい。

(本館・管理係 本郷)

経営・創業相談室を 開設しました！

毎月第 2 , 4 土曜日 / 14:00 ~ 17:00
毎月第 3 水曜日 / 16:00 ~ 19:00

富山市立図書館では、多様化・高度化する図書館サービスのひとつとして、ビジネス支援事業にも取り組んでいます。平成 15 年 4 月に、本館一般図書室内に仕事を探している人・人材を求めている人・情報や資料を探している人が気軽に利用できる「お仕事お役立ちコーナー」を開設しました。また、とやま駅南図書館においても、平成 15 年 12 月にとやま市民交流館図書サービスコーナーとして開設して以来、多くの市民にビジネス関係図書・商用データベースをご利用いただいています。

今年度、新たに起業や経営革新を図る市民に対して、気軽に相談できる窓口の提供に取り組むことになりました。9 月から、経済産業省「地域力連携拠点事業」の一環として、富山商工会議所との共催により、「経営・創業相談室」を行っています。「新しい事業を興したい」「IT を使って経営状況を把握し、次の一手を考えたい」など起業や経営革新を図る市民に対して、中小企業診断士などの専門家が助言いたします。これまで毎回数名の方からご相談を受けています。

相談場所は、堅苦しい場所ではなく、図書館の 1 階のこぢんまりとした部屋を用意していますので、お気軽にご利用ください。

小さなことでも、まだ具体的にないなくても、相談しているうちに何かのヒントが生まれるかもしれません。

(本館・館内奉仕係 北山)



ずっと、ずっと大昔
人と動物がともに この世にすんでいたとき
なりたいたいとおもえば 人が動物になれたし
動物が 人にもなれた
だからときには人だったり、
ときには動物だったり、
たがいに区別はなかったのだ。
そしてみんながおなじことばをしゃべっていた。
そのとき ことばは、みな魔法のことばで、
人の頭は、ふしぎな力をもっていた。
ぐうぜん 口をついてでたことばが
ふしぎな結果をおこすことがあった。
ことばはきゆうに^{いのち}生命をもちだし
人がのぞんだことが ほんとおこった
したいことを、ただ口にだしていえばよかった。
なぜ そんなことができたのか
だれにも 説明できなかった。
世界はただ、そういうふうになっていたのだ
『魔法のことば』
(柚木沙弥郎絵 金関寿夫訳
福音館書店 2000)より

ことばの力

古来、言霊(ことだま)と言われるように、言葉には、魂があると考えられてきました。語られたり歌われたりした言葉には、魔力があると信じられ、人々を動かしてきました。



『おれは歌だ おれはここを歩く』
(金関寿夫訳 秋野亥左牟絵
福音館書店 1992)

『魔法のことば』は、アメリカ・インディアンの口承詩を集めた絵本『おれは歌だ おれはここを歩く』にも収められています。

見開きいっぱい広がる絵とともに、狩りの歌、自然の歌、愛の歌、子守唄など言葉の力強さが感じられる絵本です。

はじめに言葉があった。それは確かだ。
だが、ケータイ・ネット時代に入来して以来、情報は怒涛のように駆けめぐっているのに、言葉はイメージの膨らみを失って、痩せ細った記号と化し、かけがえのない沈黙の間合いさえ、ミハエル・エンデの暗喩をかりるなら、「時間貯蓄銀行」に収奪されてしまった。
一体、終わりまで言葉はあるのか。
『言葉の力、生きる力』
(柳田邦男著 新潮社 2002)より

ことばの危機？



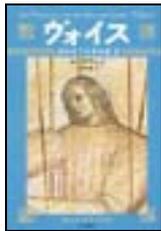
『石に言葉を教える 壊れる日本人への処方箋』
(柳田邦男著 新潮社 2006)

文明が進むにつれ、記録された言葉はみずみずしさを失い、情報が氾濫する現代ではますますその力が弱くなっています。

「言葉にいのちの響きを取り戻さなければ!」「言葉の危機は、心の危機であり文化の危機だ。」と「言葉と心」「言葉といのち」について考え続けている著者が、現代のネット社会へ警鐘をならす1冊です。

ことばは沈黙に
光は闇に
生は死の中にこそあるものなれ
飛翔せるタカの
虚空にこそ輝ける如くに
『ゲド戦記』
(ル=グウィン著 岩波書店 1976)より

本を読むということ



『ヴォイス』(ル=グウィン著
河出書房新社 2007)

『ゲド戦記』の著者、ル=グウィのファンタジー「西のはての年代記」の2巻目です。

舞台は、かつての栄光を失い、侵略者オールド人に支配されている都市アンサル。オールド人は、書き文字を邪悪なものとして恐れ、書物をもつことを禁止しました。主人公のメマーは、母がオールド人に襲われて身ごもった子どもで、オールド人に復讐の念を抱いて成長しました。ある日メマーは、生まれ育った館の小部屋に本が隠されていることを知ります。

メマーが17歳になった晩春、詩人であり語り部であるオレックがアンサルにやってきました。オレックが語る物語に人々は心を打たれます。メマーとともに、言葉や書物の持つ意味について考えたい本です。



『読む力は生きる力』
(脇明子著 岩波書店 2005)

著書は、「私はなぜ子どもたちに本を読んでほしいと思うのか」という疑問をずっとかかえてきました。

「昔は本なんか読まなかったけれど、それでもみんな育ってきた」と言われます。しかし、昔の子どもたちは生きていくのに役立つ生活文化にしっかり支えられていました。現代は、世代ごとに輪切りにされ大学生と高校生でさえ、楽しみが共有できなくなっています。

それぞれに何かを「受継ぐ」こと、そしていつかそれを「手渡す」ことの重要性を著者は訴え、そこに本を読むことのひとつの意味があると言います。本こそ、「伝えたい」という人間の思いをありありと感じさせてくれるものだからです。

ことばと脳



『100歳の美しい脳』
アルツハイマー病解明に
手をさしのべた修道女たち』
(デヴィッド・スノウドン著
DHC 2004)

修道院で暮らす高齢のシスター687名を対象に、加齢とアルツハイマー病との関係性を調べる研究の報告書です。

研究を進めるうちに、著者は驚くべきことに気づきます。シスターが修道院に入会するとき書く短い自伝を解析した結果、文章の「意味密度」が高いシスターは、脳が病気に犯されていても、アルツハイマー病の症状がでにくいことがわかったのです。つまり、成人まもないころの語彙や言語能力が、60年以上もたったあとの脳が健在かどうかを知る強力な手がかりとなっています。

もちろん、アルツハイマー病は遺伝子などほかにも様々な問題がからみ、簡単には解明できません。また、意味密度が高い文章を書く人が、他の学科にすぐれているわけでもありません。

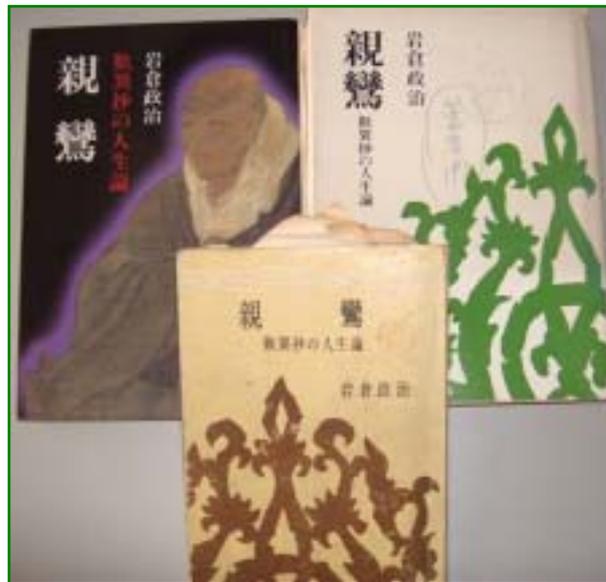
意味密度を左右するのは語彙力と読解力で、研究を手伝ったある博士は、次のように言っています。「語彙力と読解力を高めるには、子どもが小さいうちから本を読んで聞かせるのが一番なんです。」

(大山図書館 牧田)



岩倉政治文庫の資料 5

ロングセラーとなった『親鸞 - 歎異抄の人生論 - 』



「稲熱病」、「村長日記」、「空気がなくなる日」などの作品により小説家としてのキャリアをつんだ岩倉ですが、その原点となる思想は、若き日に探求を続けた仏教、とりわけ親鸞のひらいた浄土真宗にありました。

大谷大学時代は、鈴木大拙に師事して仏教を学び、『日本宗教史講話』、『仏教論』といった学術的宗教論を、「巖木勝」の筆名で出版したことは、以前に紹介しましたが、小説家として活動を続ける中で、再び親鸞の思想を見つめ直し、現代の読者に分かりやすく伝えたいという思いがあったものと考えられます。その成果として、昭和32年4月、『親鸞 - 歎異抄の人生論 - 』が出版されました。

『歎異抄』は、親鸞の弟子・唯円が、師との対話を通して、その言動を記録したもので、親鸞の思想の根幹となる部分が直接的に記されています。よく知られている「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」という言葉はその代表的な例です。本文も短くまとめられていて、浄土真宗を理解するには格好の書です。しかし、表現が文語体であるため現代の口語体に慣れた私たちには、取っ付きにくい面もあります。

また、結論にあたる部分ははっきりと書かれている反面、そこに至るまでの、思索的な道筋にあたる部分は、さほど詳細には書かれていません。例えば「善人ですら往生をとげるのだから、悪人はなおさらだ」と

書いてあっても、「普通の人であればまず、『悪人ですら往生をとげるのだから、善人はなおさらだ』と考えるであろうに、なぜ親鸞は逆のことを言っているのだろうか？」という、誰もが抱く疑問について、納得できる解答が書かれてはいないのです。この答えは、読み手が自ら解釈して解き明かさなければならぬのですが、親鸞が思索を重ねてたどり着いた結論に、誰もが到達するのは難しいことです。

岩倉は、この課題に果敢に挑みました。まず、『親鸞 - 歎異抄の人生論 - 』の本文は、すべて「ですます調」で統一し、読者にも親しみやすい工夫をしています。

また、「歎異抄」の本文を解説するにあたって、自分の身近な体験を例にあげ、キリスト教の場合や西洋哲学の考えと比較をするなど、多方面からのアプローチを試みることで読み手にとって理解しやすい工夫がされています。語り口も平易で、岩倉らしいユーモアを交えた表現も見られます。親鸞の思想の深遠な部分に迫りつつも読みやすい一冊です。こうした随所の工夫が読者の好評を博しました。

『親鸞 - 歎異抄の人生論 - 』は、同年(昭和32年)に改訂再版が出されたほか、昭和46年、昭和62年にも新版が発行されてロングセラーとなりました。

(本館・館内奉仕係 舟山)

レファレンスあれこれ

Q . 富山出身の力士「剣山」について知りたい。

A . 『富山県大百科事典』(富山新聞社 1976)には、【大相撲】の項目が279ページにあり、剣山については、歴代越中力士の今日までの歴史が解説されている。江戸期文政年間(1818~29)に11年も大関を続けた剣山(富山市)が上覧相撲で横綱の不知火と名勝負を行い、越中力士の名をあげていると書かれている。

『日本相撲大鑑』(新人物往来社 1980)では、天保年間(1830~44)の二十山部屋の大関剣山谷右衛門(富山市)は、横綱の不知火・秀ノ山とともに「天保の三傑」に数えられる。剣山は横綱に推挙されたが、自分は身体が小さいから見栄えがしないと固辞した奥床しい逸話の持ち主であると解説がある。

『国技大相撲の100傑』(講談社 1977)では、【大関 剣山谷右衛門】として取り上げられ、当時の錦絵の図版と共に本名、生年月日、出身地、しこ名、身長、体重が記されている。また、11年・21場所の間、大関の栄位を恥ずかしめなかったのはおそろべき持久力といえる。19年という長い幕内生活でありながら勝率もよく、古今二十傑にはいる横綱級の強豪だったと解説がある。

『富山県郷土資料総合目録』(富山県立図書館 1962)には、『加越能力士大鑑』(富山県立図書館所蔵)が記載されている。この目録は、富山県下の公共図書館及び富山大学に所蔵する郷土資料の総合目録であり、収録する文献に解説を付した解題書誌として活用できるものである。

『加越能力士大鑑』(加越能力士大鑑発行所 1912)には、「剣山谷右衛門」、越中富山の産、江戸天保期の実力ある大関であったことを入門時から詳細な記述がある。

Q . 台湾の「阿美族」という民族について知りたい。 世界で数少ない女系民族のひとつ

A . 『文化人類学事典』(弘文堂 1987)には、【アミ Ami】の項目があり、「阿美族は、高砂族中最大の人口を擁する集団でアミが通称となっている。早くから漢民族と交流し稲作をはじめとする文化を受け入れてきた。しかし、近年まで固有の慣習を多く残していた。一般にアミ族は、婿入り婚が行われたということで母系制大家族を形成していた。家長は最年長の女性で、日常生活の実権を握り、重要な財産は母から娘たちに相続されていた。こうしたアミ族の伝統も日本統治期から徐々に消滅し、婿入り婚に代わって嫁入り婚が一般になり、母系制が崩壊してきた」と解説がある。

『世界民族事典』(弘文堂 2000)には、【アミ 阿美族 阿眉族】の項目があり、「親族組織は、婿入り婚を取る限り母系的に構成され、台湾中部のアミ族では本家分家からなる明確な集団を構成していた」と解説がある。

『図説台湾の歴史』(平凡社 2007)では、先住民「高山族」のひとつとして「アミ」の呼称があり、台湾先住民族分布図には、東海岸部に「アミ族」の名称がある。

『現代台湾を知るための60章』(明石書店 2003)では、「アミ族は全人口の約2パーセントであるが、居住している面積は台湾の半分を占めており、特に東海岸部に集まっている。2003年までに認定されている先住民は、最新のタロコ族までを含めて、12族、39万人」と解説がある。

(本館・館内奉仕係 坂元)

平成20年10月24日富山市立図書館 編集 発行 富山市丸の内1丁目4-50 TEL076-432-7272
HP アドレス <http://www.library.toyama.toyama.jp> E-mail lib-02@library.toyama.toyama.jp